随筆「東日本大震災・あの日から満五年」

久保田　昌　兌

今日は、あの日（平成二十三年三月十一日）から数えて五回目の三月十一日である。あの日の午後二時四十六分悪魔の波は、東北の三陸海岸から福島県までの太平洋沿岸を襲い、一瞬にして一万数千人の命を奪い家や工場そして海山・田畑を壊滅していった。あの日を忘れない。

いま私は机上に次の資料を広げてある想い出にふけっている。

資料①写真集「ふるさと石巻の記録」（河北新報社）

②「三陸海岸大津波」（作家吉村昭氏著作）

③「朝日新聞」と「大分合同新聞」（三月十一日号朝刊）

④「松尾芭蕉のおくの細道」（長谷川櫂氏著作）

⑤「新詳高等社会科地図」（帝国書院）

⑥「地図で訪ねる歴史の舞台」（帝国書院）

⑦「みやぎ観光マップ」（宮城県観光協会）

（注）この随筆では福島県の原子力発電所事故の話には触れないことにする。

思えば遠い昔になるが、昭和二十年、家族は三つに別れて疎開し、私は母と兄と赤子の弟の四人で福島の二本松市を経由してから母の実家のある現在の石巻市河北町十三浜村字吉浜に落着してそこで一年間を過ごした。貧しかったが「兎おいしかの山、小鮒つりしかの川」の様な夢の一年間であった。しかし、一年後仙台に引越し、伊達政宗で有名な城下町の中の南鍛冶町に移り住んだ。小学校は荒町小学校で六年生の時、「荒城の月」の作詞で有名な土井晩翠先生が亡くなったのを校内放送で聞いたのを覚えている。その後愛宕中学校を経て仙台一高へ入学した。

高校生活はただ驚いた。旧制高校の先生や大学教授の様な偉い方々の授業は教科書ばなれが多く理解し難かった。しかしこれが個性を育てる教育であったことはまちがいないのである。それの証左に四人の先輩の名をあげて説明したい。

先輩の名前は劇作家井上ひさし氏、俳優菅原文太氏、憲法学者樋口陽一教授、河北新報一力英夫氏の四人で五年上の先輩である。いづれも大学に進み社会に出てから名をなし一流となった。同一クラスからこれほどの有名人を輩出したのも学業はともかく、高校時代の自由能勤な教育の結果であり又自らも個性を磨きあげた各人の努力の成果でもあろう。

松尾芭蕉が「おくのほそ道」を旅したのは元禄二年（一六八九）四十六歳の時である。石巻では民謡で有名なあの日和山（ひよりやま）から石巻の町を眺めているのだがそこで今度のような津波をみたら、どのような句を詠んだであろうか。「夏草や兵どもが夢の跡」と平泉でかっての戦場を見下ろし詠んだ一句が大いにしのばれる。

以上で粗末な駄文は終りとするが最後に天災に関する箴言を記す。

①「天災は忘れたころにやってくる」（物理学者寺田寅彦氏）

②「人間は忘れることと忘れないことを同時に出来る動物である」（朝日新聞）

③「災害は忘れる暇なくやってくる」（気象台長花宮広務氏）